# 「大阪学」について考える

作道　洋太郎

## 大阪文化の多彩さ

恩師宮本又次先生の著作のなかに、『大阪万華鏡』（プレーンセンター発行・昭和六十年）がある。これは「なにわ塾叢書」の一冊であり、大阪府の「なにわ塾」での塾生を対象にして、大阪の歴史と文化を語ったもので、その講座のコーディネイターは原田敏丸氏（当時、大阪大学経済学部教授）であった。

宮本先生は平成三年三月に逝去されたので、この労作は晩年に比較的近い時期の作品といえるように思う。この書物に、先生は『大阪万華鏡』という書名をご自身で付けられた。

先生の最後の著作となった『随想大阪繁盛録』（文献出版・平成三年）の「あとがき」を見ると、万華鏡について次のように述べ、さきに刊行した「なにわ塾叢書」の書名に万華鏡をそのテーマに選んだ意図のようなものがうかがわれる。

「大阪の姿は、高度成長の波で昔の懐かしい面影は次第に姿を消し、日々に変貌していく。寂しい気にもなるし勿体ない思いもするが、所詮は時の推移と思わなくてはなるまい。万物は成長、破壊、矛盾といろいろのものが万華鏡の中のガラス屑のようにさまざまに連なり、また

離ればなれになって変幻きわまりない図模様を呈す。戦前の大阪に生きたものの使命として、少しでも次の世代に書き残したいと思う次第である。」

この「あとがき」は、平成三年二月に書かれた。それは八十四歳で亡くなられた宮本先生が、その前月に執筆されたものである。その著作には大阪町人社会の盛衰が活写されていて、その根底に流れる大坂町人文化の豊かさや深さから、万華鏡にみられるようなきらめく世界との共通点に注目されたのではなかったかと想像される。そのきらめく世界が、「なにわ塾叢書」では『大阪万華鏡』というネーミングになったように思う。

## 大阪学の世界

いま先行き不透明な混沌とした世の中が続くなかで、江戸時代の生活や文化が改めて見直されようとしている。「江戸学」とか「大阪学」などが提唱されているのも、新しい視点から江戸時代を再発見し、そこから伝統的なにわ大阪の活力を捉えたいという気持ちがあるからであろう。

宮本先生は随分以前から「大阪学」に着目され、『関西文明と風土』（至誠堂・昭和四十六年）の中で、大阪学のパラダイム（枠組み）を提示している。同書は四つの部門に分かれ、Ⅰ「関西文明論」、Ⅱ「大阪の生活と商法」、Ⅲ「大阪商人と東京商人」、Ⅳ「風土と経済社会」から成っている。

宮本先生は同書の「序」で次のように述べ、私どもが大阪学に接近するための有効適切な手がかりを与えて下さっている。

「Ⅰはそれなりに江戸との対比における上方の文明を浮き彫りにしていると思うし、Ⅱ・Ⅲは長年にわたる私の上方研究、『大阪学』究明のいわば落穂集としてなにほどかの意義はあろう。またⅣは、問題を上方に限定せず、日本列島全般の風土性を、歴史性との交錯において考察しようとしたものである。恩師黒正巌先生はすぐれた経済史家であったが、また経済地理学においても先駆的な業績を残されている。風土性への関心は、かねて黒正博士の高教のもとに培われたものであり、今後も関西文明の特色を関東との対照において解明する作業は執拗につづけていきたいと考えている。」

このように述べ、大阪学を文明論の視点を導入して、同

書では多彩な大阪文化の特質を風土性と歴史性との関連において捉えている。

さらに興味深いのは、こうした見方や考え方が黒正巌先生からの教示を得たものであったことを明らかにしている点である。宮本先生の大阪学が黒正先生の広域志向的な非常に学際的な研究に学問的基盤を置いていたことは、大阪学の生い立ちを考える上で看過できないことのように思われる。

黒正先生は現在の大阪経済大学の創立者で、日本経済史研究所の創設者でもある。明治二十八年に岡山県で生まれ、京都大学農学部教授となり、宮本先生は非常に学問的影響を受けた。宮本先生の「黒正先生の学風と人物」（黒正巌先生を偲ぶ会編『黒正巌先生』昭和五十五年）を読むと、非常に麗しい師弟関係に感動を覚えるような気持ちになってくる。

黒正先生は百姓一揆の研究で前人未踏の研究領域を開拓し、偉大な業績を残された。宮本先生は、前記の回想記で「これは先生の生涯を貫く研究として学界の至宝というべきものであります」と述べている。故郷の備前岡山の地域史研究にも力を注ぎ、現在の地域史研究の先鞭をつけられた先見性もいま光り輝いている。古代からの豊かな歴史を持つ吉備文化や、海洋性文化の特色がある瀬戸内文化からも影響を受けた黒正先生の視座から宮本先生は若き日に多くの教示を受けられたのであろう。

黒正先生はさらに、マックス・ウェーバーの『一般社会経済史要論』を邦訳し、またアドルフ・ウェーバーの工業立地論の『孤立国』の理論を導入して、昭和初年にいち早く社会科学の研究に新しい方法を積極的に取り入れるなど、日本経済史の開拓者として本庄栄治郎先生、菅野和太郎先生らとともに不滅の研究業績を残された。黒正先生は昭和二十四年に岡山大学の学長現職で五十四歳の時に逝去されたが、その学統は京都歴史学派の中に脈々と受け継がれている。

私が大学院に入った頃、宮本先生から黒正先生の学風をしばしば語って下さる時があったが、今から考えると、それは宮本先生のいわれる「大阪万華鏡」のルーツを教えていただいた最初の機会でもあったように思う。

## 大阪学の課題と方法

大阪学というテーマで総括されている話題はきわめて多

彩であり、その内容も豊富である。大谷晃一氏の『大阪学』（新潮文庫・平成九年）、『続大阪学』（同年）や、『大阪学　世相編』（経営書院・平成十年）、『大阪学　文学編』（編集工房ノア・同年）などをみても、記述の対象は生活・文化・学芸・経済・経営など多方面に及んでおり、大阪人の人間像がその奥深い視点から捉えられ、共感を覚えるところが頗る多い。

このように、大阪学の課題は多彩であるが、それと同時にその研究方法もきわめて学際的であり、生活史・社会史・文化史・経済史など、複眼の視点がつらぬかれているように思う。したがって、大阪学の研究対象や方法は広範多岐にわたるが、グローバルな視点からいくらか観点を変えて、ミクロな見方から考えてみると、その捉え方が具体化してくるように思われる。

すこし話が飛躍するようであるが、私はかねてから、大阪学の特質は懐徳堂や適塾にみられる大阪の実学の伝統によく示されているのではないかと考えている。この実学というコンセプトは、実用的で卑近なものと解釈されやすいが、これはむしろ生活や考え方の変革や革新を志向した積極的な意味合いが込められていたと見た方が適当であろう。懐徳堂や適塾の実学志向性が今でもよく語られているのは、こうした独創性や革新性を含んだ生活や学問の理念に注目しているからであろう。大阪は、そのようなパラダイム（枠組み）の変革をこれまでにも転換期において実現してきたところに大きな特徴があった。いま大阪学が問われているのも、実学志向の先見性、革新性、創造性、開拓者精神などの再発見を強く求める声が高いからであろう。

## 大阪学と懐徳堂

懐徳堂は享保九年（一七二四）、「懐徳堂五同志」と呼ばれた五人の大坂町人たちが中心となって設立された町人塾であった。その中心メンバーとなったのは、醤油醸造業者の道明寺屋吉左衛門（富永芳春）、舟板問屋の備前屋吉兵衛（吉田可久）、貸家業の三星屋武右衛門（中村良斎）、江戸積み木綿問屋の舟橋屋四郎右衛門（長崎克之）、鴻池家三代当主宗利（むねとし）の養子で両替商の鴻池屋又四郎（山中宗古）の五人であった。いずれも富裕な町人で、懐徳堂のパトロンの役割を果たした。講舎は大坂船場の尼崎町一丁目（現在、中央区今橋四丁目、日本生命本社の場所）に開設し、初代学主には浅見絅斎（けいさい）の高弟として知られた三宅石庵を迎え

入れ、その門下の中井甃庵が学問所預り人となり、創設期における懐徳堂の基礎づくりに非常な尽力を惜しまなかった。

三宅石庵の学風は、「その首は朱子、尾は陽明にして、声は仁斎に似たり」と言われ、「懐徳堂の鵺学問」とも評された。「鵺」というのは頭が猿、胴は狸、尻尾は蛇、手足が虎、声は虎鶫に似ているという正体不明の怪獣であった。首は朱子学、尾は陽明学、声が京都古義学派の創始者伊藤仁斎のようで、諸説をあわせて折衷したものであったという。

懐徳堂では、四書五経を教えたが、石庵は『中庸』の解釈においてすぐれ、広く学んでこれを自由に批判し、かつ中正を得ることが自由討究の学問的精神であることを明らかにした。こうしたところに懐徳堂における学問の特質がうかがわれ、学問としての整合性よりも、その実践性をむしろ重視し、町人向けの教養的儒学を創造した。その点、江戸幕府の学問所であった江戸湯島の昌平黌とは性格をいちじるしく異にしており、懐徳堂の学問は虚心坦懐で、町人教育の本旨にそうものであった。

懐徳堂が創設された享保期（一七一六～三六）は、幕藩体制の大きな転換期にあたっていた。この頃になると、元禄ブームの時代は過ぎ去り、インフレ基調からデフレ基調に転じ、商家経営も〝攻めの経営〟から〝守りの経営〟へと戦略転換をおこなうことを余儀なくされていた。

商家では、家業経営のルールを明文化した「家訓」を制定し、大坂町人が生活信条としてきた始末・才覚・算用の精神の徹底を図り、家業永続の基礎を確立することにつとめた。懐徳堂の学問は、こうした転換期を乗り切るための経営哲学の発見に貢献したと言ってよいであろう。

懐徳堂における実学は、こうした変革期に素早く対応し、新しい進路を構築するための基本的認識をおこなうことを課題として、儒者グループや大坂町人五同志たちが協力して取り組んだ学問的成果であったと見ることができよう。

## 懐徳堂学派の人びと

大阪学について語り、懐徳堂の話にいささか立ち入り過ぎた感じがするが、私は大阪学の由来や今後の課題を考える場合、この懐徳堂にみる学問の伝統には大阪の歴史的特質を最もよく示しているものがあるように思われてならな

いからである。そのようなわけで、今すこし懐徳堂の話を続けたい。

懐徳堂では、初代学主三宅石庵の没後、高弟の中井甃庵が二代学主となり、ついで石庵の子春楼が三代学主としてその跡を継いだ。その後、甃庵の長男竹山が四代学主となり、弟の履軒が陰から竹山を助けた。この竹山・履軒の時代には懐徳堂の名声が広く全国的に知れわたり、懐徳堂の黄金時代を迎えた。

その頃、懐徳堂に学んだ人びとの中から、『出定後語』『翁の文』などを著わした富永仲基、『夢之代』『宰我の償』などの著作で知られる山片蟠桃、『三貨図彙』『茶器名物図彙』など多くのすぐれた書物を著わした鴻池屋伊助（草間直方）など、著名な町人学者を多数輩出した。

富永仲基は、「懐徳堂五同志」の有力者であった富永芳春の三男に生まれたが、のちに「吾は儒の子に非ず、道の子に非ず、亦仏の子に非ず」と言い、儒教・神道・仏教を批判し、この三つの道のほかに「誠の道」のあることを明らかにした。このように、仲基は懐徳堂における教学の権威を相対化し、自由討究の批判的立場を主張した。そのため恩師の三宅石庵からは破門されたくらいであったが、懐徳堂の生んだ天才であった。

最近、加藤周一氏が『富永仲基異聞――消えた版木』（かもがわ出版・平成十年）を公刊し、それが戯曲化されて前進座で上演され、今に生きる懐徳堂の知的な世界や独創性のある大阪町人社会の伝統が見直されたことは、まだ記憶に新しいものがある。私は偶々東京池袋でその芝居を観劇する機会があったが、その劇場での雰囲気の中から大阪学の本質的なものが身近かに感じ取られたように思った。その本質とは、自由な独創性と革新性とでもいうべき市民社会的な大坂の原形にほかならない。仲基は正徳五年（一七一五）に生まれ、延享三年（一七四六）に死去したが、その長くはなかった三十一年の生涯には、大阪学の真髄が深く刻み込まれているように思われる。

山片蟠桃は寛延元年（一七四八）、播州印南郡神爪村（現在、兵庫県高砂市）の農家の次男に生まれた。十三歳の時、北浜の両替商升屋（山片家）平右衛門に奉公し、経営危機におちいっていた主家の経営を建て直し、のちに別家を許されて升屋小右衛門を名乗った。経世家として知られる海保青陵が、蟠桃の経営手腕や学識を高く評価していることによっても、蟠桃の偉大さがうかがわれる。

懐徳堂では、竹山・履軒に師事し、中井門下の諸葛孔明といわれたくらいの傑物であった。主著の『夢之代』では、天文・地理・歴史・制度・経済・無鬼などについて述べ、地動説を主張し、霊魂不滅論を否定して無鬼論のような唯物論的傾向を示した。また該博な世界地理の知識を持ち、欧州諸国の動向をさぐり、アジアにおける植民地化の危機をいち早く訴えていた。

富永仲基・山片蟠桃とともに、懐徳堂の生んだ草間直方は宝暦三年（一七五三）、山城国京綾小路烏丸の枡屋唯右衛門の子として生まれ、鴻池家に奉公した。のちに鴻池家の別家である草間家の女婿となり、鴻池屋伊助を称え、豪商鴻池善右衛門の片腕として活躍した。

直方は家業経営とならんで寛政年間から著作活動を開始した。その代表作となったのが『三貨図彙』四十四冊であった。この書物は、江戸時代に書かれた貨幣史・金融史・物価史・貿易史・度量衡史など、多方面にわたる貴重な労作である。

それは家業の両替商経営とも密接に関連したものであり、両替業の歴史的背景を明らかにした学術的業績であった。

直方はまた隠居後、学術研究のかたわら風流茶事で余生を楽しみ、『茶器名物図彙』九十五巻を著わした。同図彙は近世茶道史の名著といわれる。

## 適塾の開設と学風

懐徳堂とならんで、大阪大学における学問の源流とみられている適塾は、天保九年（一八三八）に緒方洪庵によって開設された。

洪庵は文化七年（一八一〇）、備中足守（あしもり）藩の家臣佐伯惟因（これより）の三男として生まれ、十五歳の時、父に従って大坂に移り住んだ。それは父が足守藩の大坂蔵屋敷の留守居役として赴任したからであった。

その翌年の文政九年（一八二六）、洪庵は蘭学医者の中天游（なかてんゆう）の思々斎塾に入門した。その時、佐伯姓から緒方姓となった。緒方家は佐伯家の祖先にあたっていた。

中天游は、懐徳堂の中井竹山・履軒兄弟と関係の深かった麻田剛立門下の間重富（はざましげとみ）から後援を得た橋本宗吉の門人にあたり、その点からみると、適塾の学問は間接的ながら、懐徳堂の学問のひろい流れの中に位置づけられよう。

洪庵は、天游の指導で、江戸に出て坪井信道塾で学び、

さらに長崎で修業を重ね、天保九年（一八三八）に大坂に帰り、瓦町で蘭学塾（洋学塾）を開き、医業をおこなった。この年、天游の門人で先輩にあたる億川百記の長女八重と結婚した。この塾を適々斎塾、略して適塾と呼んだ。この家塾を瓦町から現存する北浜の建物に移転したのは弘化二年（一八四五）であった。その時、大坂町人から援助を受けたと伝えられる。

洪庵は、『病学通論』『扶氏経験遺訓』『虎狼痢治準』の主著三部作のほか、多くの著書や訳書があり、その業績は多方面にわたっている。また、『扶氏医戒之略』はドイツの名医フーフェランドの書物『医戒の大要』を抄訳して、これを十二章にまとめたもので、医師の生活信条や行動基準を簡潔に述べ、適塾に学ぶ人びとの処世訓ともした。

その邦訳に際して、洪庵は直訳よりも意訳を重視し、読む人の側にたって説得力のある訳文になるよう心掛けた。それは西洋医学の理論体系ばかりではなく、その現実への適用を重要視した洪庵の実学思想を物語るものであった。

この『扶氏医戒之略』の邦訳文については、緒方富雄氏が『蘭学のころ』（昭和十九年）の中で、原文の逐語訳との対比を試みている。この点に関して、さきに私は「緒方洪庵の学風と大坂の経営風土」（『適塾』第一六号、昭和五十八年）の中で述べたことがあるので、ここではその結論をのみ書き添えておくことにしたい。

私はその小論の中で、『扶氏医戒之略』の邦訳の背後には、洪庵が医師の行動基準の確立を目指した革新的な意図があったことが確認できたように思った。それは適塾の創設が、最後の幕政改革が断行された天保期であり、近世から近代への大転換期にあたっていたことにも対応している。洪庵は蘭学・医学教育を通じて、「当今必用の西洋学者」の育成に全情熱を傾注した。塾生の中から、福沢諭吉、大村益次郎、橋本左内、佐野常民、長与専斎、高松凌雲、大鳥圭介、武田斐三郎、花房義質、池田謙斎ら、日本の近代化の中心人物となった人びとを多数輩出した。

こうした革新者を大坂船場の学塾で育成した背景には、洪庵の実証性と合理性とに裏付けられた実学志向の医学体系があった。江戸前期における武士道の確立、江戸中期の町人道の形成とならんで、江戸後期にみられた医師道の生成には、江戸時代を多彩なるものとした、目には見えないなにわ大阪のマグマやエネルギーのようなものが感じ取られるように思う。

大阪学は現在、かなり多義的な概念を含むものといえよう。それにもかかわらず、小稿では懐徳堂や適塾をめぐる大阪の経済風土や精神風土にその典型を見る、というような結論に近づけようとした感じがする。それは多様な内容を持つ大阪学のコンセプトとの関連から軌道修正が必要であろうが、紙幅も少なくなったので、それは次の機会にゆずりたい。また、大阪学と前記の大阪万華鏡の関わり合いについても、いま少し別の機会にさらに立ち入って考えてみることにしたい。

（さくどう　ようたろう・大阪大学名誉教授）